

『007/ワールド・イズ・ノット・イナフ』

1999年/イギリス/マイケル・アプテッド監督作品

何でもありのアクション、 ジェームズ・ボンドはやはり格好いい！

会員 鈴木 俊 (60期)

私はもともとアクション映画が好きで、しかも007シリーズはどれも好きであるところ、多数ある007シリーズの中でこの作品を選んだ理由は、主役であるダブルオーセブンこと『ジェームズ・ボンド』を演じるピアース・ブロスナンが好きだからである。『ジェームズ・ボンド』といえば何人もの俳優が演じており、何と言っても有名なのがショーン・コネリーだと思うが、私の中ではピアース・ブロスナンが一番自分のイメージする『ジェームズ・ボンド』に合っているのである。スマートで、冷静かつ軽い感じがとてもよい。

ストーリーとしては、今までの007シリーズとの違いを指摘するならば、ボンドが親しくなった女性が実は悪役であり、最後にはボンドが彼女を殺してしまうという点があるかもしれない。その悪役女性はソフィー・マルソーが演じているのであるが、もう1人のボンドガールが目立たないくらい存在感がある。勸善懲悪な流れは変わらないのであるが、ボンドのボスで

ある『M』が敵に捕まってしまうなど今まで以上にストーリーも考えられているように思う。

やはり007シリーズといえば、何でもありのアクションだと思う。最初から飛ばし気味なぐらいのアクションが楽しめる。雪山でのスキーアクションも凄い。その後も、パイプラインでのアクション、キャビア工場での戦い、クライマックス部分などアクションは次から次へと続いていく。

残念なのは、今回はあまりボンドカーが活躍していないような気がするであろうか。毎回すごい装備を整えて登場してくるが、あっという間にスクラップになってしまうボンドカーも私は大好きである。やはりアストンマーチンこそが正統なボンドカーというイメージであるが、本作品ではBMWが使われている。前作品である「トゥモロー・ネバー・ダイ」のBMWボンドカーは本当に万能で、欲しかった…。

いずれにしても、最後にはやはりジェームズ・ボンドは格好いいということが心に残るのである。